
剣盗りモノガタリ

松下星哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣盗りモノガタリ

【Nコード】

N1121Y

【作者名】

松下星哉

【あらすじ】

とある国の一人の少年が様々な国を旅しながら妖魔やモンスター、剣の使い手等と闘い、色んな出会い、そして人として剣士として成長していく剣の物語。

バトル、ラブコメ要素ありな昔風の印象を与えつつ、実は未来の話。

第1話〜序章〜（前書き）

とりあえず、不慣れなので見づらいかもしれませんがご容赦下さい。

第1話〈序章〉

〈プロローグ〉

・・・その日、山向こうの夜空が煌めき、大気が震えた。
家の外では村人たちが何事かと、騒いでいた。今日は祭りで特に人出が多い。

「何だ、何だ今の音は」

「一瞬光ったぞ」

「何もこんな目出度い日に・・・」

俺、トウヤ・ヒノカは家の外から聞こえてくるそんな話し声を聞きながら、そっとため息を吐き、目の前の人物へ話しかけた。

「親父、外が何やら騒がしいが様子を見に行かなくていいのか？」

おれが自分の父親である目の前の人物、タチオ・ヒノカにそう言ったのには二つ理由がある。

一つは、俺の親父はこの村で村長に次ぎ二番目にお偉いさんだということ、もう一つは俺自身外に出たいということ。なのだが・・・
「心配は要らん。話し声を聞く限りでは、このあたりには被害もなさそうだし、余程大事になれば村長が出張ってくるだろう。それよりも今は儀式を終わらせるほうが先決だ。」

・・・これである。ちなみにこの儀式というのは、この村の古くからのしきたりで、15歳になると元服げんぷくを迎えた、つまり一人前の大人として認めるために、様々な儀式、説明等が行われる。

まあ、それに伴い色々な権利、例えば剣を持てるようになったり村

の外へ出れるようになったり、だとか。ようやく旅に出れるなあ・

「つまり、そのことを踏まえていれば、いざというときにも・・・トウヤツ！聞いているか！？」

「モ、モチロン」

聞いてませんでした。

「ふう。お前というやつは・・・まあ、いい。儀式は終わりだ。どうせお前のことだ、最後まで真面目に聞くとは思ってない。」

と親父殿は苦笑しながら、

「明日には旅立つんだろう？しばらく帰ってこんだろうから今日はせっかくの祭りだし楽しんでこい」

と話が分かることを言い出した。

「ああ、ありがとう親父。・・・父上。行ってきます。」

俺は立ち上がると、親父に一礼し、外へ飛び出した。

暦255年、7大陸から成る、とある国のとある村の一室より物語は始まる・・・話は12年程前に遡る。

へへ暦243年へ

空は澄み小鳥のさえずりが聞こえる、そんな爽やかな朝だった。そ

の空の下にある屋敷の庭先で・・・

「えいっ！やあっ！とうっ！」

朝の静寂を打ち破るように一人の少年がそんな気合いとともに木剣を振り回していた。軽くよろけながら。

「トウヤ、剣は力任せに降ってもダメだぞ。それに剣に振り回されすぎてるな」

と、たしなめる声が少年の傍から聞こえた。

それは、黒髪を短髪に揃え身の丈180？へ僅かに届かない筋肉隆々な青年だったが、その少年を見守る黒い瞳の眼差しはとても温かなものだった。

「むう。でも、このけんがおもたくてむずかしいよ、とうちゃん」

と、トウヤと呼ばれたこれも黒髪黒瞳の少年は口を尖らせて抗議する。

「はは、そうだな。トウヤの身体より剣のほうが大きいもんな。ただ剣を振るうのは力任せじゃ駄目なんだ。ちょっと貸してみろ。」と、父ちゃんと呼ばれた青年タチオはトウヤと呼ばれた少年より剣を受けとる。そして、論すような口調で、

「いいか、トウヤ。人には体内に流れるオーラってものがある。それを上手く操ることで力も速さも何倍にもすることができるとだ。」

と、タチオは木剣を受けとると同時に全身にオーラを纏いだした。淡く身体が光りだし、剣先まで光りだした。

「よく見ておけ。これがオーラだ。このように自分の身体から手に

持った武器にまでオーラを行き渡らせることで破壊力や反応速度が数倍から数十倍に跳ねあがる」

と、おもむろに目の前にある大岩へ剣を振りかぶる。

ドゴン！

そんな音がし目の前の大岩が真つ二つに割れる。

「このようにオーラを纏った武器で斬ると木剣といえどかなりの破壊力になる」と説明する。

「まあ、いきなりやれといっても無理だろうから徐々に覚えていけばいいさ。まあ今日はここまでにしとこう。汗を拭いとけよ。」

そういつてタチオはトウヤの頭を軽く撫でて、家のほうへ踵を返した。

「おーら・・・？」

三歳の少年には言葉のみの説明が難しいと判断したのかは分からないが、実際みてもよく分からないといった風情の少年がそこに立ち尽くしていた。

第1話〜序章〜（後書き）

ご意見、ご感想あればよろしくお願い致します。

第2話く旅立ちく(前書き)

大筋みたいなものを書いてないので内容がわかりづらいかもしれません。

また、文章の拙さはご容赦下さい。

第2話く旅立ちく

〈暦255年〉

いざ、出発しようとして家の庭先で佇んでいたら、ふと修行を始めた頃の記憶が頭を掠めた。

「そういや、あの頃はまだ自分の本当の能力も知らなかったな」
軽く独りごちてみる。

「まあ、右も左もわからんようなガキだったからな。しょうがないか」

その時後ろのほう、つまり家の玄関から大きな声がした。

「トウヤー！元気でやれよー！魔物に気をつけてなー！」

親父も心配性だな

「分かってるってー、父さん！それじゃあ、行ってきまーす！」
俺も後ろを向き右手を挙げて大声で返す。

「さてと、行きますか」

こうして俺は生まれ育った村を出た。この先起こるであろう様々な出来事に胸を躍らせながら。

（村の外）

そして今、感覚的に村を出て30分ぐらいもした頃だろうか、俺は何と言うか困惑していた。

というのも、

「聞ってるの？ トウヤ？ まずはこっちの海沿いよりも山道を通ったほうが隣の村にずっと近いのよ？」

と、話しかける奴が居るからだ。

「いや、だからな、俺が聞きたいのは隣の村への近道じゃなくて、何故お前が村を出て此处に居るかということなんだが・・・ネク」
するとそいつは何故か微かに目をそらしながら、

「だ、だから私も母様からちゃんと許可を取って村を出てきたって言うってるじゃない！」

と軽くキレながら言ってきた。

たしかにこいつ（ネク・カナワ♀）の母ちゃん（アオイ・カナワ♀）の大らかな性格なら、例え女の独り旅でも、大して気にせず旅の許可をくれそうだが・・・ちなみにこのネクは、俺のお隣さん家の一人娘で、俺にとって所謂幼なじみってやつだ。しかも誕生日が二月ばかり俺より早い。そのせいかやたらと年上ぶってきやがるのがアレだが・・・はぁ・・・そんなことよりも、

「いや、俺が言いたいのはなんで俺が村を出た後にお前が後ろから追ってくるようなタイミングで現れたってことなんだが。お前はどう少し早く村を出ることができた筈だろう？」

と俺が言うと、こいつは言い訳がましく、

「い、いや私も自分の誕生日に村を出ようとしたのよ？ ただ、色々都合が合わなかったっていうか、気がのらなかったっていうか、・

・・独りじゃ不安だったっていうか・・な、なによ！こんな美少女と一緒に旅ができるっていうのに何が不満なわけ！？」
と逆ギレしてきた。

不満っていうか、まあ確かにこいつの見てくれは身長155？程度で小柄だけど、腰まで伸ばした絹みたいなサラサラの黒髪に異常なぐらい白くて綺麗な肌、2年ぐらい前から急に大きくなりだした胸にも関わらずやたらと細い腰、猫みたいな大きな黒い瞳と整った形の鼻や口、と傍から見たら間違いない美少女の部類には入るんだろうが、いや入るのか？

まあ、人口500人程度の村では同年代の子供は居らずいまいち基準がよく分からんが、そこは大して問題じゃない。

俺の自由気ままな独り旅計画が・・・

撒くか？いや、それでもしこいつが魔物や山賊とかに襲われたらさすがに寝覚めが悪いな。

はあ・・・

まあ、とりあえず隣の村までは一緒に行ってそれから考えてみるか。規模が俺の村よりも5倍はあるって話だしな。

「分かった、分かった。一緒に行こうぜ。とりあえず隣の村まで。口入屋で仕事も探す必要があるだろうし、宿屋も探す必要」

そこまで言って、異常な気配と聞いたことがない声が後ろから聞こえた。

振り替えるとそこには、顔が魚っぽく、体つきは人っぽい何かが立っていた。

第2話く旅立ちく（後書き）

ご意見、ご感想、等あればよろしくお願い致します。

第3話く遭遇く（前書き）

いまいち行の間隔がつかめないので、読みづらいかもしれませんが
ご容赦ください。

第3話〈遭遇〉

そいつは今まで見たこともないような姿をしていた。魚のような顔（といっても大きさは人の顔ぐらいあるが）、大人と同じぐらいの背丈（165〜170？程度）、手足に生えた鱗と青っぽいというか、緑っぽいというか何とも表現し難いぬめっとした皮膚、明らかに人間ではなかった。

ネクが

「は、半魚人？」

と言う。

「半魚人？あれって魔物の部類に入るのか？確かに異形じゃあるが・
・・」

そもそも、今の世でいうところの魔物の定義とは、

『人語を解さず人間へ害意を持つ異形の生物』とされている。つまり、こちらの言葉が通じずしかもちちらへ攻撃してきたり食料にしてこようとする生物が魔物というわけだ。

だから、ものは試しだと俺はそいつに話しかけてみる

「あー、えっとその奴、俺達に何か用か？」

と、俺が言うとその半魚人？らしき生物は目を大きく見開いた。

「オマエ、俺を見て驚かないのかっ!？」

何か言葉が通じた。

「い、いや、確かに見た目は人間じゃないけど、別に襲いかかってくるわけでもないしな。それよりも今お前が喋ったことに驚いたが・・・」

俺がそう言うと、半魚人は

「オレはこう見えてオレの一族では天才と呼ばれている。一族の中には、人語を喋れない奴も居るぞ？むしろ喋れない奴のほうが多いな」

流暢に返してきた

「そうか、天才の一言で片付けるのもどうかとおもうが・・・別に俺達を食おうとしたり襲いかかってくるわけじゃないんだな」
俺がそういう言うとそいつは憤慨して、

「人間が人間以外の生物に対して偏見を持っていることは長の話や人間の書物などで知っているが、勝手に決め付けるな！そもそも俺達魚民は海藻や貝ぐらいしか食べない大人しい生物だ！」

「魚民っていうのか・・・まあ、お前の言いたいことは分かった。じゃあ、改めて聞くが俺達に何の用だ。まさか、ただ話しかけたかっただけか？」

そう言うとき魚民は、

「それもある。この道を人間が通ることは珍しいからな。」

と言った。

するとネクが、

「そうか、ここはもう村の結界外になるのね。だからか・・・漁師の人達は普段は村付近の結界内で働いてるからね。」

ちなみに結界とは、かつて250年以上前に歴が始まった当初、この『火の大陸』を制覇した時の王スサノオが各地域を統治しやすくするために、結界技能を持った者、当時妖術師と呼ばれた者をかき集めて、当時存在していた集落毎に施していったものである。その結界の範囲を基準に現在の各村が作られていった。正式な呼び名は人口100人以上の集落を村、人口1000人以上の集落を町、人口10000人以上の集落を街という。街規模になると、俺の村では見たこともないような珍しい物がある。何年か前に来た行商の持ってきた、あの甘い菓子・・・

「それで、本当に何の用なんだ？確かにもの珍しいとは思うが、この道に全然人が通らないというわけでもないだろう。なんでわざわざ俺達に？」

と俺が言うと魚民は、

「確かに、人間自体は何回か見たことはある。ただ俺の好奇心は並外れていてな、珍しい人間の番が見れて思わず興奮して近づいてしまった。俺達魚民は成人して時期がくれば、卵を産み出して子孫を残すが、オマエら人間は雄と雌が交尾して子孫を残すのだろうか？だから交尾が見れると思ってつい近づいたんだ」

といった。なるほど、つまりこの道は人が通ることもあるが俺達のように男と女が二人揃って通ったことはない。それが珍しくてつい近寄ったと。納得だな。

すると横の奴が

「な、な、な、何を言ってるのよあんたっ!? つ、つがいっ!? こ、こ、こ、こうびっ!? な、なんであたしとこいつが番でこ、こ、交尾しなくちゃいけないわけっ!? 交尾するにしても、こ、こっちだつて、段階とか準備とかそれなりに雰囲気とか必要なんだからねっ!?!」

「うん、落ち着け。微妙に論点がずれてるぞ。あー、それと魚民？俺達は別に番つがいでもなんでもないぞ。ただの知り合いの男と女ってだけで、別にお前が期待することはなんにもないぞ。」

そう言々と魚民は、

「そ、そうなのか。珍しいものが見れると思ったのだが・・・まあ、初めて人間と話せただけでもよしとしよう。」

と納得した感じだった。

「まあ、俺も珍しい奴と喋れてよかったよ。それと偏見は改めるわ。悪かったな。旅の途中だから、俺達はもう行くぞ。縁があったらまた会おうぜ。」

俺はそう言うと言を振って魚民に別れを告げ、踵を返して歩き始めた。

「・・・ただの知り合い・・・そうよね、そんなものよね・・・」

第3話く遭遇く（後書き）

大まかな設定は纏まっているのですが、それを文章にするのが難しいです・・・

第4話く魔物く（前書き）

やたらと説明くさい話になりました・・・

第4話　魔物

俺の村は名前をカリユウ村といい、場所はこの火の大陸の最南端に位置する。

その名産品といえば、海に近いという地の利を活かして収穫の多い海産物が真っ先に挙げられる。

他の地域に行商に持って行く主な商品としては、一番近い村でも、大人の足で歩いて片道に最低3日は掛かるためやはり日持ちのする魚貝類の干物等が多くなるのは、まあしょうがない。

隣村は海から遠いためそれらは毎回完売するらしい。

他には、農作物やら織物やらが主力商品とは言わないまでも、安定した供給を行えるので、隣村には固定客がついているらしい。

そんな感じで物についてはそれなりに他の地域と上手く取引をしていると村の行商人達は言っていた。

物以外でカリユウ村の有名なモノと言えば二つありその1つには剣術が挙げられる。

それは、ここ数年でじわじわと有名になってきたという話だがそれには理由がある。

この大陸の首都であるカグツチという街で年一回開催される格闘大会でのここ数年の優勝者が、カリユウ村出身のヒノカ流剣術の使い手だということだ。

まあ、知り合いの姉ちゃんだが。

何でも華奢な見た目とは裏腹に鬼神の如き動きで物凄く強いことから人目を引き出身地や流派が他の大会参加者や観客から注目されたらしい。

優勝後、街にある城への士官の話、旅の用心棒、町や村等の警備、ついでに縁談が相当数本人へ舞い込んだらしいが全て蹴って今は街

で悠々自適に暮らしているとその人のお母さんは言っていたが。まあ余談だが。

もう1つの有名なこととは現在より何百年も前から、

『世界の7大陸にはそれぞれの大陸に一本ずつ、神剣しんけんが刺さっておりそれが大地や生物を活性化させ、生活を豊かにしている。それを引き抜き手にした者は人であれ鳥であれ魚であれ神と等しき力を得るだろう』

という確信めいた、冗談のような、『7神剣物語』（ななしんけんものがたり）、という話が言い回しや言語が違うにしてもどの大陸にも似たような話が伝えられているらしく、その話を基に、火の大陸初代覇王であるスサノオが大陸統治後に火の大陸の神剣を追い求めたという話が残っている。

結局見つかったという話はなく（どの大陸でも）、近年に、とある探索方法が見つかるまでは、神剣探索についてはずいぶんと下火になっていたが、その新しい探索方法により、神剣らしき場所に大体的見当がついたということで、現在街では神剣探索隊が編成されているらしい。

その探索方法とは単純な話で、「神剣がある場所に近づくほど魔物が活性化するのではないか」

という説をとある学者が以前に打ち出したらしく大陸中の測量と魔物の分布図を作成するため旅を10年程度し、最近漸く完成しそれを見当した結果、大陸の南側の方が明らかに魔物の質、量が高いということが判明したのだった。

だから、大陸の南側に神剣が刺さっている可能性が高いのではないか？との説が広まっていき、最南端にあるカリユウ村に何かしら神剣と関係があるのでは？という話が広まっていき、カリユウ村が大陸で有名になったのはまあ、大会優勝者の話と合わせ、偶々そんな

時期が重なった、のだと思うことにしよう。
まあ、何故急にそんな事を思ったかといえば・・・

「トウヤ！なにボーっとしてんのよっ！右に回りこまれてるわよ！」

とネクが叫んでいた。

というのも昨日魚民と別れ海沿いの道を進んだあと、山道に入った俺達は今、魔狼の群れに囲まれていた。魔狼とは、見た目は狼のような、だが狼の体長を倍ぐらいにした（ざっと見て3mぐらいか）、全身真っ黒な毛に覆われた、自分達以外の生物は餌ぐらいにしか考えていない魔物の呼び名であり、並の人間が戦えば大人2人程度でやぐ一頭と渡り合えるといった程度の強さの生物である。そんなやつが俺達を取り囲んでいた・・・10頭ぐらい。

いや、待て。数がおかしくないか。聞いた話では確かにこの生物の習性は数頭群れて獲物を襲うということだが、明らかに多いよな。いくらこのへんが大陸の南とはいえ活性化しすぎじゃないか。そう思いつつ俺は右側に近づいてきた魔狼へ対して腰から抜いた剣を横に薙ぎ払い魔狼を胴から真っ二つきした。

「ギャウンッ！！」

そんな鳴き声と共にその魔狼は倒れた。

「グルルルッ」

「ウーッ」

「ガオン！ガオン！」

その様子を見た他のやつが俺達を遠巻きにしながら吠えてきた。
今にも飛びかかってきそうな体勢で。

「さすがにあれだけの数に同時に襲いかかられたら不味いな」
俺がそう言うのとネクが、

「あんた何言ってるの！？あんたが有無を言わさず切り捨てるから手持ちの食糧を蒔いてその隙に逃げようとしたあたしの作戦が台無しじゃない！」
と言ってきた。

「いや、そうは言うけどな？それは一頭二頭ぐらいなら何とか通じる作戦だろ？さすがにあの数には足りないと思うんだが・・・」

するとネクは

「じゃあ、どうするの！？行商の人が持つてる魔物避けもないし、逃げ切れそうにもないし、どうしようもないじゃない！？」
と焦った様子である。

「まあ、落ち着け。俺の強さは知ってるだろ？あの程度の数どうってことないさ。」

俺が言うのとネクは、

「ま、まあトウヤが強いのは知ってるけど。あたしが言いたいのは剣でどうにかなる数？ってこと」

と言ってくる。

そこで俺は漸く合点した。こいつへは同じ剣術道場での剣技ぐらいしか見せたことがなかったっけ。

「違う。俺の本当の実力を見せてやるよ。・・・下がってろ」

俺はそう言うのと愛剣の炎斬^{えんざん}へと意識を集中させ始めた。すると・・・
「えっ？なにこれ、剣が光り始めた？」
ネクが言う。

「ああ、これが所謂オーラってやつだ。このオーラを利用することによって、剣と俺の体は何倍にも強化することができる。ただ昔見たけどニルナ姉もオーラを使ってたぞ？知らなかったか？」

そう言う俺はオーラを纏った炎斬をネクへ見せる。ちなみにニルナとは三歳上のネクの姉貴で、実は大会優勝者その人である。

「ニルが？確かに昔から強かったけど・・・」

と若干腑に落ちない顔をする。

「まあ、いいや。さて行くぞ、魔狼どもっ！」

そう言いながら俺は魔狼の群れに飛び込み斬りかかった。

ズバツ！ザシュツ！バキツ！

「グオーツ！」

「ギャン！ギャン！」

「クウーン・・・」

そんな鳴き声とともに魔狼は全頭地面に倒れ伏した。

「まあ、こんなもんだ。強いだろ？俺？」

俺がそう言うのとネクは、微妙に納得してなさそうな顔で、

「オーラって何かズルい・・・」
と結構心外なことを言っていた。
俺は軽く嘆息し旅を再開した。

いや、別にズルくはないだろ・・・

第4話く魔物く（後書き）

不快感がなければそれでいいです。ご意見ご感想あればお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1121y/>

剣盗りモノガタリ

2011年11月4日03時00分発行